

インプットトーク②：全国エリアマネジメントネットワーク会長 小林重敬氏

・全国エリアマネジメントネットワークでは、京都大学の諸富徹先生のご著書、『資本主義の新しい形』（2020年）をベースに2回にわたってサロンを開催したが、その際に諸富先生がおっしゃっていたのは、日本の製造業はあまりにも物づくりに偏りすぎてきたこと、今後、製造業においても非製造業においても、イノベーション、クリエイティブな要素を持ち込まなくてはならないということ。そのためには人的資本投資が必要で、そのための組織構築が必要だというお話をいただいた。

・こうしたお話をエリアマネジメントに取り組んでいる立場から理解をすると、ソフト、ハード両面でエリア環境整備が必要だということではないかと認識している。本日は、まさに大都市の都心における実践エリアで、今動いているイノベーション、クリエイティブな要素を持ち込む動きを加速させる必要があるのではないかという話をしたい。

・地域を再生させるために必要な要素を、エリアマネジメントのサイドで考えると、コミュニティ・クリエイティブとコミュニティ・グリーンではないかと思う。コミュニティ・グリーンは、コミュニティに存在するグリーンを中心とする物的な構成要素。ただ、それだけではなく、それがあることによって実現するさまざまなエリアの持続可能性がその背景にある。コミュニティ・クリエイティブは、目指すべきイノベーションを起こすエリア、多様なクリエイティブな人材が集まるエリアにすること。

・こうした視点で考えると、東京や大阪の大都市の都心部ではそういう方向性を感じさせるエリアマネジメントが行われている。大丸有地区で代表的な仲通りをはじめ、行幸通り、それから大手町の森、それから大手町緑道というような緑づくりが盛んに進められている。行政と協働して民間の協議会組織でさまざまに工夫して、壁面後退、民地提供、区道の狭めなどによって空間をつくり出し、そこに緑を生み出していくという努力をしてきた。さらにそれをソフトで対応するために、道路空間活用について考え、結果として大丸有地区で勤務される方々がさ

まざまな場で利用できる空間が生まれている。あとで紹介されるエコツェリア協会も、環境、社会、経済という三つを回すギアを使って、大丸有地区で働いている方々がサードプレイスとして使える空間をつくり出している。

- ・虎ノ門地区では、大規模に再開発をして、そこに超高層を建てることによって生まれる空気を緑で覆う、グリーン化するという考えに則って開発が行われている。緑の空間をつくり出すと同時に、新しいクリエイティブな要素の組み入れも行い、COREビルという虎ノ門ヒルズエリアの1カ所につくった建物の中に、東大と世界最高のデザインを教える機関といわれているロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）が一体となったDesign Labとして活用しており、多くの人々を集めている。また虎ノ門麻布台エリアでは、中央広場と緑が超高層の周辺にあり、モダン・アーバン・ヴィレッジという名前でグリーンとウェルネス、緑に包まれ、人と人をつなぐ広場のような街、コミュニティ・グリーンあふれるエリアをつくろうとしている。

- ・大阪うめきた地区の開発は、第1期ではグランフロントという建物が立ち、ナレッジキャピタルという関西の知が交流する空間をつくり出して大変なにぎわいを示している。第2期は真ん中に4.5ヘクタールの緑をつくり、その北と南にクリエイティブな要素を入れた建物が建てられることになっている。1期と2期の開発が一体となって、コミュニティ・グリーンとコミュニティ・クリエイティブそのものをこのエリアで全体としてつくり出したいということであり、一体となって新しい大阪の新しい情景をつくり出す開発が行われつつある。

- ・本日の会場となっている竹芝は、2階から5階までがテラスになっていて、テラスに多くの緑がつけられている。また、建物内では中村伊知哉教授を中心にCiP協議会が新しいコンテンツ、デジタル産業の拠点をつくろうとしている。さらに、船着き場も新たにつくることとしておりこれも新しい情景をつくり出す場となるのではないかと考えている。